



Title	メタフシカ 第55号 彙報
Author(s)	
Citation	メタフシカ. 2024, 55, p. 115-121
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100363
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【彙報】

○ 哲学哲学史・科学技術社会論

〔研究室について〕

現在（2024年11月15日）、学部の哲学・思想文化学専修には28名が在籍している。大学院の哲学哲学史専門分野には博士前期課程・同後期課程に15名と科目等履修生が1名在籍しており、科学技術社会論専門分野には博士前期課程・同後期課程に12名が在籍している。また、哲学哲学史専門分野には舟場保之教授、嘉目道人准教授、三木那由他講師、米田恵助教が所属しており、科学技術社会論専門分野には望月太郎教授、中村征樹教授（兼任）、平川秀幸教授（兼任）、小門稔准教授が所属している。

本年度の講義・演習は以下の通りである。舟場教授「カントの平和論(2)」、「カント『永遠平和のために』の Kommentär を読むⅢ・Ⅳ」、「ドイツ哲学基本文献講読Ⅰ・Ⅱ」、「ハーバーマスはカント的かヘーゲル的か(2)」。

嘉目准教授「ブーバーの対話思想(1)」、「フィヒテ哲学の研究(5): 中期知識学における絶対知」、「フィヒテ『知識学への第一序論』を読む(1)・(2)」。

三木講師「言語哲学入門」、「認識論入門」、「論理学初級(1)・(2)」、「Stanley Cavell “Performative and Passionate Utterance” を読む(1)・(2)」。

米田助教「認識論と実践哲学の諸問題1・2」。

望月教授「技術哲学：ジオフィロソフィー入門—技術の「現地化」の論理と倫理—」、「不正論」、「G・ドゥルーズ&F・ガタリ『哲学とは何か』を読む」、「モース『贈与論』を読む」。

中村教授「不正から考える現代科学」（江口太郎氏と共同）、「事故から考えるテクノロジー」、「科学技術社会論文献購読」。

小門准教授「生殖技術と倫理」、「人体利用と技術」、「STS ワークショップ(1)・(2)」。

平川教授「科学技術社会論セミナー」

そのほか、本研究室のリレー講義「西洋哲学通史（デカルトから現代まで）」（仏文研究室山上浩嗣教授協力）が開講されており、また、例年通り、各教授ないし准教授、講師ごとに、学位論文執筆のための演習が実施されている。

なお、他部局の教員による講義として、言語文化研究科のMalik Luke 特任准教授が「文字通りの意味と隠喩的な意味の関係」を開講している。

研究室の成果発信として、本機関誌『メタフュシカ』と欧文機関誌 *Philosophia OSAKA* を毎年刊行している。同欧文機関誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。舟場教授 „Was in der Friedensschrift nicht thematisiert wird“、嘉目准教授 “A Brief Commentary on Habermas’s Concepts of the Subjective World and Dramaturgical Action”、三木講師 “Mansplaining as Appropriation of Miening”。

招へい研究員の櫻井真文氏 „Die aktivistische Theorie der Würde in Fichtes *Über die Würde des Menschen* (1794)—Ein post-kantischer Ansatz zur neuere Debatte um Kants Begriff der „Würde“—”。

また、大阪大学文学会編『待兼山論叢』哲学篇を通じて、毎年、研究成果を発信している。同誌の前年度号には、当研究室から以下の論文が掲載された。志水凜「アーレントと法の正統性」、大西健太「『精神現象学』における「懐疑主義」と「不幸な意識」」。なお、研究室公式ホームページ (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy>) および YouTube 公式チャンネル

videometaphysical を通じて、研究教育活動の関連情報を随時発信している。また研究室の活動基盤として、研究会 handai metaphysica を主催している。

研究室の関連催事として、2023 年 11 月 11 日に UNESCO「世界哲学の日」記念イベントとして、小門穂科学技術社会論准教授による講演会「出自を知る権利を考える」を開催した。(2023 年 11 月～2024 年 10 月の 1 年間に実施されたものを記載。以下も同様。)

そのほか、院生主催の研究会が定期的に開催されている。2023 年 2 月に第 21 回哲学ワークショップがオンラインで開催された。そこでは、以下の発表がおこなわれた。中谷碩岐(人間科学部)「前期デリダにおける「言語の normalité」と「exemplaire な言語」の関係について」、柴尾万葉(西洋美術史博士前期課程)「ピピロッティ・リストの表現に関する一考察—エクリチュール・フェミニンとの類似性を中心にして—」、溝越大秦(哲学哲学史博士後期課程)「言語ゲームは誰のものか」。

〔教員について〕

舟場教授が 2024 年 3 月に論文 "Was in der *Friedensschrift* nicht thematisiert wird" (*Philosophia OSAKA*, (19), pp. 35-44) を執筆した。また、2023 年 11 月 28 日にフランクフルトで開催された 3. Supranationales Philosophie Kolloquium Frankfurter Tag で "Was in der *Friedensschrift* nicht thematisiert wird" を発表した。2023 年 12 月に雑誌 *Jahresmagazin 2024 der Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften* において "Im Gespräch mit ..." (Christoph Marksches (Hg.), , pp. 66-67) のインタビューを受けた。2024 年 1 月 12 日にオンラインで行われた第 15 回大阪哲学ゼミナールで「カント『永遠平和のために』の特殊性について」を、2024 年 8 月 21 日に大阪大学で開催された第 16 回大阪哲学ゼミナールで「<人権のアボリア>の行方」を発表した。

嘉日准教授が 2023 年 12 月に論文「パースペクティヴの相補性と根元語「我—汝」—ハーバーマスとブーバーの比較に向けて—」, (『メタフュシカ』(54), pp. 1-13) を、2024 年 3 月に論文 "A Brief Commentary on Habermas's Concepts of the Subjective World and Dramaturgical Action ", in: *Philosophia Osaka* (19), pp. 27-33) を、2024 年 6 月に「〈書評〉田端信廣『哲学的思惟と誌的思惟のインターフェイス——フィヒテ vs ヘルダーリン、ノヴァーリス、Fr. シュレーゲル——』晃洋書房、二〇二二年」(『倫理学研究』(54), pp. 178-181) を執筆した。また、2024 年 4 月 7 日に Goethe-Institut Villa Kamogawa in Kyoto で開催された Workshop: Martin Buber und das Individuum der Moderne. Das dialogische Prinzip und das moderne Individuum in Philosophie und Theologie Hundert Jahre *Ich und Du* で "Re-encountering the Gestalt in Our Lifeworld: Buber and Habermas on Dialogue of Art" を、2024 年 5 月 18 日に高知大学で開催された第 83 回日本哲学会大会一般研究発表で「ブーバー『我と汝』における直接的憎悪の意味」を発表した。

三木講師が 2023 年 11 月に単著本『言葉の風景、哲学のレンズ』(講談社)を、2024 年 10 月に単著本『言葉の道具箱』(講談社)を刊行した。2024 年 9 月に論文「コミュニケーションと意味の占有」(下里誠二・木下愛未編『精神科医療における暴力とケア』(金剛出版第 3 章)を、2024 年 2 月に Mansplaining As Appropriation of Meaning (*Philosophia OSAKA*, No. 19, 13-25) を、

2024年5月に論文「コミュニケーションにおける不正義」(『中部哲学年報』55号, 1-11)を、2024年9月に学術記事「いかに「耳を傾ける」か」(『土木學會誌』109巻7号, 38-39)を執筆した。

米田助教が2024年1月にオンラインで行われた第15回大阪哲学ゼミナールで「世界市民主義の可能性に向けての一考察 —ハーバーマスとデリダにおける「普遍性」と「特殊性」—」を、2024年5月18日に高知大学で開催された第83回日本哲学会大会一般研究発表で「法における形式的普遍性とそのポテンシャルティ——カントの普遍主義の継承者としてのハーバーマスとデリダ」を発表した。

望月教授が2024年4月20-21日にPPFPM, Perpustakaan Raja Tun Uda, Shah Alam, Selangor, Malaysiaで開催されたSeminar on Asian Philosophy (JADUAL PEMBENTANGAN SEMINAR FALSAFAH ASIA KEDUA, SFA-I)で'Promoting STS in Asia: Cultural Challenges'を、2024年8月10-11日にPPFPM, Perpustakaan Daerah Hulu Langat, Bandar Baru Bangi, Selangor, Malaysiaで開催されたSeminar on Asian Philosophy (JADUAL PEMBENTANGAN SEMINAR FALSAFAH ASIA KEDUA, SFA-II)で'A Philosopher's Turn to Religion: Miki Kiyoshi and Shinran'を発表した。2024年8月21-23日にバンコクで開催されたDay 2 Breakout Panel 12, Asia Centre's 9th International Conference, Shrinking Civic Space in Asiaで、'For Free Civil Activities in Today's World Where Social Networking Has Become the Norm: A Case Study on Young Generation in Japan' (hosted by Pacifica GK & Rikkyo University)を共同発表した。2024年6月26日に社会貢献活動「私の大阪銭湯研究序説」, 落語 de カルチャ! みつや交流亭を開催した。

中村教授が2023年11月に「シチズンサイエンス：市民の科学研究への多様な関与」(『情報の科学と技術』73(11), pp. 476-47)を、2024年3月に「アンケートから見える研究公正の現状と課題：研究公正アンケート実施報告」(中村征樹, 市田秀樹, 三浦麻子, 東島仁, 『RI : Research Integrity Reports』6, pp. 3-22)を執筆した。2024年10月21日に開催された文部科学省研究公正推進事業研究公正シンポジウム「新たな研究不正行為への対応と科学の公正性の確保に向けて」で「特定不正行為以外の問題にどう対応するか 二重投稿、オーサーシップ、査読偽装を中心に」を報告した。2023年12月7日に開催された第46回日本分子生物学会年会で「研究公正の取り組みの実効性向上にむけたアンケート調査の活用」(中村征樹, 東島仁)を、12月15日に開催された第44回日本臨床薬理学会学術総会で「臨床研究における研究公正の実態をどう把握するか：質問紙調査の開発とその課題」(中村征樹, 市田秀樹, 東島仁)を、2024年6月4日に開催された8th World Conference on Research Integrityで“Developing an Effective Tool for Assessing Research Integrity in Japanese Research Institutions”(M. Nakamura, H. Ichida, Y. Wajima, J. Higashijima)を、9月23日に開催されたToyota Foundation Workshop on Research Integrity Promotion in Asiaで“Visualizing the Current Status and Challenges of Research Integrity”を発表した。

小門准教授が2023年11月に「生殖技術とルール—当事者をどう守るか」(松田毅・藤木篤・新川拓哉編著『応用哲学』昭和堂、103 - 115頁)を、2024年1月に「生殖補助技術」(ジェンダー事典編集委員会編『ジェンダー事典』丸善出版、64-65頁)を、2024年3月に「日本における妊

娠一周産期ケアと女性の経験への影響」(磯部哲、河嶋春菜、ギョーム・ルセ、フィリップ・ペドロ編『公衆衛生と人権 フランスと日本の経験を踏まえた法的検討』向学社、232-242頁)を刊行した。2024年4月に論文「生殖補助医療により生まれる子どもの権利」(法律時報96(4)、50-55頁)を、2024年10月に論文「日本における緊急避妊・中絶関連医薬品へのアクセス拡大」(年報医事法学、39)を、2024年1月に共著論文“The Role of Male Consent in Assisted Reproductive Technology Procedures: an Examination of Japanese Court Cases,” (Yuko Muraoka, Minori Kokado, Kazuto Kato, Asian Bioethics Review, 16, 165-183)を執筆した。また2023年12月9日に大阪大学において開催された科学技術社会論学会第22回年次研究大会の実行委員会記念シンポジウム「研究倫理審査をアップデートする: ELSI/RRRIを組み込んだ技術開発・社会実装の作法」で「科学技術社会論学会会員の研究倫理審査に関する経験」を、2024年3月8日に大阪で開催された日本臨床試験学会第15回学術集会総会のシンポジウム「3 海外の臨床審査委員会のあり方から何を学ぶか」で「被験者保護と倫理審査委員会—法律時報2024年4月号特集公開シンポジウムリプロダクティブ・ヘルス&ライツの多角的検討ランスの動向から」を、2024年3月28日に東京・TKP ガーデンシティ御茶ノ水で開催された法律時報2024年4月号特集公開シンポジウム「リプロダクティブ・ヘルス&ライツの多角的検討」で「生殖補助医療と子どもの権利」を、2024年6月13日にオンラインにて開催されたPND研究会で「中絶の自由—フランスの動向から」を、2024年7月14日に聖心女子大学で開催された2024年度家族問題研究学会大会で「出自を知る権利をめぐる法整備と背景—フランスを中心に—」を、2024年9月15日に中京大学名古屋キャンパスで開催された第40回日本解放社会学会のテーマ部会「性的マイノリティの生殖・出産・育児」で「出自を知る権利への認識と実践—当事者インタビューから」を、2024年10月10日に大阪大学で開催された「大阪大学第1回はばたく次世代研究交流会ピッチセッション〈異分野融合研究〉」で「人文×医: 生殖医療の倫理をめぐる研究」を、2024年10月12日に北海道大学で開催された北海道大学大学院文学研究院応用倫理・応用哲学研究教育センター主催公開シンポジウム「トランスジェンダーと医療」で「性別の変更と生殖医療」を、2024年10月19-20日にNational Taiwan University, Taipei, Taiwan. において開催されたThird party Reproduction: Governance, Relatedness, and Globalization 大三方生殖: 治理、連結性、興全球化で“Egg donation and the right to know half-siblings”を発表した。

〔学生について〕

哲学哲学史専門分野は以下の通りである。

岩本智孝(博士後期課程)が「新たな啓蒙はいかにして可能か: カッシーラー哲学による啓蒙主義/ロマン主義史再考」の研究において日本学術振興会2023-2024年度特別研究員奨励費を受託した。2023年11月26日にオンラインで開催された日本哲学会第3回秋季大会で「ロマン派と政治的ロマン主義——カッシーラーとマイネッケによる評価めぐって」を、2024年10月13日に京都大学で開催された関西哲学会第77回大会で「カッシーラーによるヘルダー歴史哲学の解釈と評価」を発表した。

崎山英俊（博士後期課程）が論文「未完のプロジェクトとしての憲法」（『メタフュシカ』第54号, pp.15-27, 2023年12月）を執筆した。また、2023年9月3日に大阪大学で開催された第14回大阪哲学ゼミナールで「未完のプロジェクトとしての憲法」のタイトルで発表した。

佐々木尽（博士後期課程）が論文「〈閉じない体系〉としての認識実在論——ハーバーマース『真理と正当化』のブランドム批判をめぐって」（『哲学』第75号、2024年4月, pp.156-169, 査読有）を執筆した。また2023年5月20日に早稲田大学で開催された日本哲学会第82回大会で「ハーバーマース『真理と正当化』における認識実在論」を、2024年3月26日にオンラインで開催された第1回金曜ゼミ春期研究会で「パトナム「内在的実在論」をめぐるアーベルとハーバーマース」を、2024年10月12日に京都大学で開催された関西哲学会第77回大会において「パトナム「内在的実在論」をめぐるアーベル＝ハーバーマース論争」を発表した。

志水凜（博士後期課程）が「（研究ノート）アーレントの真理論」（『メタフュシカ』第54号, pp.45-53, 2023年12月）を、論文「アーレントと法の正統性」（『待兼山論叢』第57号, pp.41-56, 2023年12月）を執筆した。また、2024年2月17日にオンラインで開催された第22回哲学ワークショップで「（共同討議）政治的／社会的／私的領域——アーレントとバトラーから——」を、2023年9月にオンラインで開催された第2回哲学倫理学コロキウムで「法の制定と政治的＝歴史的判断」を発表した。

楊泓（博士後期課程）が2023年11月11日に群馬大学で開催された日本カント協会第48回大会で「カントの『法論』における他者」を、2023年9月3日に大阪大学で開催された第14回大阪哲学ゼミナールで「『カント政治哲学講義』における判断と行為」を、2024年10月30日に大阪大学で開催された「6th International Seminar for the Promotion of Interdisciplinary Research and International Exchange」で「From Moral Philosophy to Reflective Judgment: Rawls as a Successor of Kant's」を発表した。

大西健太（博士後期課程）が論文「『精神現象学』における「懐疑主義」と「不幸な意識」」（『待兼山論叢』第57号, pp.57-74, 2023年12月）を執筆した。

成田玲央奈（博士後期課程）が2023年9月16日にオンラインで開催された第1回哲学倫理学コロキウムで「ジュディス・バトラーにおける相互依存と可傷性の考察」を、2024年2月17日にオンラインで開催された第22回哲学ワークショップで「（共同討議）政治的／社会的／私的領域——アーレントとバトラーから——」を、2024年10月30日に大阪大学で開催された6th International Seminar for the Promotion of Interdisciplinary Research and International Exchange で 'Consideration of the Performative Effects of Assembly Discussed by J.Butler' を発表した。

内藤正博（博士前期課程）が論文「メアリ・ウルストンクラフトの自由概念について」で日本哲学会『哲学の門』優秀論文賞を受賞した。論文「メアリ・ウルストンクラフトの政治哲学」（『若手研究者フォーラム要旨集』第8巻第号, pp.23-26, 2023年9月, 査読有）を、「（文献紹介）エリザベス・フレイザー著『メアリ・ウルストンクラフトの政治的な政治理論』（『メタフュシカ』第54号, pp.65-71, 2023年12月）を、論文「メアリ・ウルストンクラフトの自由概念について」（『哲学の門』第6号, pp.34-46, 2024年3月, 査読有）を、論文「カント啓蒙の批判的再検討——

世界市民的教育を踏まえて——」(『哲学の探求』第 51 号, pp. 電子版, 2024 年 3 月) を執筆した。また 2023 年 7 月 16 日に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された 2023 年度哲学若手研究者フォーラムで「カント啓蒙の再検討 ——世界市民的教育を踏まえて——」を、2023 年 9 月 8 日に大阪大学で開催された人文学研究科第 8 回若手研究者フォーラムで「メアリ・ウルストンクラフトの政治哲学」を、2023 年 9 月 16 日にオンラインで開催された第 1 回哲学倫理学コロキウムで「ウルストンクラフトによる体制論の可能性」を、2023 年 12 月 8 日に大阪大学で開催された第 8 回大阪大学豊中地区研究交流会「知の共創」で「フェミニズムと近代：メアリ・ウルストンクラフト紹介」を、2024 年 1 月 13 日にオンラインで開催された第 15 回大阪哲学ゼミナールで「ウルストンクラフトにおける世界市民主義についての考察」を、2024 年 3 月 8 日に大阪大学で開催された第 25 回 handai metaphysica 研究例会で「《文献紹介》エリザベス・フレイザー著「メアリ・ウルストンクラフトの政治的な政治理論」」を、2024 年 3 月 26 日にオンラインで開催された第 1 回金曜ゼミ春期研究会で「知識人の行方——サイド再読——」を、2024 年 6 月 23 日に大阪大学で開催された日本 18 世紀学会第 46 回大会で「ウルストンクラフトにおけるグローバルな正義——コスモポリタンと「国民性」」を、2024 年 8 月 20 日に大阪大学で開催された第 16 回大阪哲学ゼミナールで「カール・シュミットと脱政治化の問題」を発表した。

濱本涼介（博士前期課程）が 2024 年 7 月 13 日に開催された若手研究者フォーラムで「アイデンティティを横断するフェミニズム：J・バトラーの普遍概念と平等主義に立脚して」を、2024 年 9 月 17 日にオンラインで開催された第二回哲学倫理学コロキウムで「承認可能性をめぐる闘争——規範の脱構築としてのポリティクス」を発表した。

科学技術社会論専門分野は以下の通りである。

HAO ZHECHEN が論文「BMI（ブレイン・マシン・インタフェース）の報道に関する日中比較分析」（日比野愛子との共著、『科学技術社会論』第 21 号, pp.89-105, 2023 年 2 月）を執筆した。また、2023 年 8 月 25 日に慶應義塾大学で開催された生物史分科会「夏の学校」で「脳神経科学をめぐる ELSI 議論の動向」のタイトルで発表した。大阪大学人文学研究科 教育ゆめ基金助成を受託した。

西川晃弘（博士後期課程）が論文「科学的な市民調査の仕組みとその変遷：大阪 NO2 一斉測定運動を事例に」（Co * Design NOTE / No.3, 2024 年 5 月, p.1-24）を、『『暮らしの手帖』の商品テストとわたし』（火ゼミ通信, 第 114 号, pp.2-2, 2024 年 4 月）を執筆した。また、2023 年 12 月 9 日に大阪大学で開催された第 22 回科学技術社会論学会年次大会で「生活者が科学技術を評価するための仕組みの必要性和課題—『暮らしの手帖』の商品テストと日本工業規格 JIS を例に一」を、2024 年 5 月 24 日に東京大学で開催された日本科学史学会 2024 年次総会第 71 回年会で『『暮らしの手帖』第一世紀における商品テストの変遷』を発表した。

郝哲辰（博士後期課程）が『脳科学と疑似脳科学』（第 8 回若手研究者フォーラム要旨集, 第巻第号, pp.19-22）を執筆した。また、2023 年 9 月 8 日に大阪大学で開催された大阪大学人文学研究科第 8 回若手研究者フォーラムで「脳科学と疑似脳科学」を、2023 年 12 月 9 日に大阪大学で開催された第 22 回科学技術社会論学会年次大会で脳神経科学の報道に関する日中比較分析」

を発表した。

葉柳朝佳音（博士前期課程）が2024年9月6-7日に東京大学で開催された2024年度生物学史分科会「夏の学校」で「ユクスキュル『理論生物学』における種の環世界について」のタイトルで発表した。

哲学・思想文化学専修は以下のとおりである。

濱本涼介（現哲学哲学史専門分野・博士前期課程）が2024年1月12日にオンラインで開催された第15回大阪哲学ゼミナールで「ジュディス・バトラーの非暴力における倫理的応答性と平等主義の原理」のタイトルで発表した。

森島淳貴が2024年3月26日にオンラインで開催された第1回金曜ゼミ春期研究会で「政治空間に蔓延するキャンセル・カルチャー——政党禁止をめぐる動向の記録と分析——」を、2024年8月19-21日に大阪大学で開催された第16回大阪哲学ゼミナールで「規範の正統性と公共性」を、また2024年10月30日に大阪大学で開催された6th International Seminar for the Promotion of Interdisciplinary Research and International Exchange で「Reconsidering the Concept of the “Public Sphere” — from the Citizen’s Movement in Solidarity with Palestine」を発表した。

（米田）